

ゆうかり放送委員会提供  
**ゆうかりに乾杯**  
第8回放送の概要 (2009年10月24日放送)

**パーソナリティ**

さくら (安本久美子)  
タロウ (佃 由晃)  
なかちゃん (中嶋邦弘)

**コアラさんの地域瓦版**

アコちゃん (三木文子)



“放送直前打合せ”

**ミキサー**

門ちゃん (門田成延)  
一ノ瀬悟

**相談役**

わだかん (和田幹司)

**会計**

小山俊則

「7つ 8つ 9つ とう といち」でおなじみの「十一の奈良漬」は、「灘の生一本」の酒粕に漬け込み仕上げた自慢の味です。食事の締めくくりに、サンドウィッチや巻寿司などにも御愛用ください。今日は、「十一の奈良漬」黒田食品さまの御協力を頂きました。一人暮らしでも安心な「コレクティブハウス・悠遊館」を扱ってられる、北区の不動産会社、不老様 (078-958-6226) のご協力を頂きました。

**1. オープニング**

11月第2日曜と23日に六甲全山縦走大会が開催される。各地からツアーを組んで参加される方も多い。新型インフルエンザが小学校など大流行している。運動会や遠足が中止になったり、影響が大きい。予防接種も医療関係者から始まったばかりでどのようになるのか現状ではよくわからない。また、先月放送した三木大宮八幡神宮の秋祭りを見に行ったが、話を聞いていた以上にその素晴らしさに感動し「男の美学」を感じた。

**2. ゲストコーナー：西林寺副住職 中杉隆法さん**

阪神淡路大震災後、国立療養所長島愛生園を定期的に訪問された経験などから、ハンセン病と回復者の方について今後我々が考えるべき課題についてお話を伺った。

愛生園を訪問するようになったきっかけは、京都の大学にいた当時はハンセン病については何も知らなかったが、1995年、4回生の時に震災でお寺が全焼し、町全体が真っ黒焦げになり多くの方が亡くなった。仏教を勉強する学校であったので漠然と卒業後はお寺に帰り法事をしたりお葬式を勤めたりという生活を考えていたが、一瞬にして帰る場所がなくなり焼け野原に立ち、自分はこれからどのように生きていくべきかを考えさせられた。被災後の神戸において炊き出し、仮設住宅を訪問したことにより色々な人々に出会った。出会った仲間からハンセン病の長島愛生園に一度行きませんか誘われたことがきっかけになった。

独身の時に行き始め仲良くしてもらい、結婚すると言ったときすごく喜んでお祝いしてくれた。生まれて数ヶ月の赤ちゃんを連れて行った時、喜んでくれたが抱っこはしてくれなかった。療養所の方は子供を生むことは許されていなかったため、赤ちゃんという存在に触れることはなかったため、赤ちゃんをどのように扱ってよいかわからないこと、また病気自体は感染症ではあるが感染力が弱く、発病が少ない病気でこれで死に至ることはなく、自然治癒も多々あった。日本で

は1907年「らい予防法」が成立し、この病気に罹ったものは全て療養所に収容される隔離政策の中で、療養所の人々は感染しないことは頭ではわかっているにもかかわらず赤ちゃんに触っても感染したらどうしようという恐怖感がある。大丈夫だから抱いてあげてくださいと言っても生まれて何ヶ月ということもあったのか最初は抱くことが出来なかった。今は毎年のように子供を連れて行くが、いい加減にしておけというくらい遊んでもらっている。長島愛生園は岡山県瀬戸内市のリゾート地牛窓の近くの長島という島にあり自然が一杯で、小学校1年生と5歳の子供は神戸では自然とのふれあいが難しいので蟹や魚を取ったりして生き生きとしている。

先輩に連れられて行く前と行ってからとで変わったことは、初めは何の予備知識もなく白紙の状態で行き始めた13年前はハンセン病は完治していた。これは昭和18年にプロミンという特效薬が出来たことによりらい菌を持った人がいなくなったためである。病気そのものはなくなったが神経を侵される病気のため、熱いものを持って熱いと感じず、釘が刺さっても痛いと感じない。全身の神経が侵されていくが最後に残るのは匂いの感覚であり、火鉢に手を当てていてやけどをした時、焦げた手の匂いで初めてやけに気づくことになる。病気そのものより後遺症で指を切断したり、またプロミンが出来るまでは実験的な医療が行われてきた結果、その薬の副作用で失明した人がいた。最初に愛生園に行ったときは外見上の後遺症があり、見た目にも最初は怖いところだなと思った。しかしいろいろ話を聴くうちに何故このような姿になられたかの根拠や、療養所におられる方の人生を聴いていくうちに、最初に思った怖いという感覚よりもっと大切なことがあることを感じ、今もずっとその感覚、気持ちで関わり続けている。

愛生園にはお寺、キリスト教の教会、天理教の教会がある。療養所に宗教施設があるのは不思議なことであるが、これは最初に入所したときに3つのことを必ず行うことに関係している。一つは本名の他に園名（偽名）を作り名前を変えさせること。これはハンセン病の被害が本人だけでなく家族にも及ぶ、すなわちハンセン病の人が出ると家族はその村では生きていけない村八分の状態になり、婚約が決まっても破棄されたりし、本名で療養所に入っていることがわかると残された家族に大変な被害が起きるため、違う人間として生きていかざるを得なかった。二つ目は入所にあたり家族が用意してくれるいくらかの金を、療養所からの逃亡を防ぐため所内でしか使えない金（園内通用券）に替えてさせてしまうこと。三つ目は宗教を決めさせること、すなわち入ったときに貴方は何の宗教に所属しますかを聞かれる。これは療養所に一旦入ると生きてここから出ることはなく、あなた方は個々に死んでいき、療養所でお葬式をすることになるのですよということのためである。宗教が生きていく上での拠り所になることもあるが。

ハンセン病はいわれなき偏見から差別が起きている。今後回復者の皆さんが生きていく上での社会上、生活上での問題については、1907年に成立した「らい予防法」が1996年まで存続していたことが大きい。ハンセン病は前世の報いであるというような間違った認識が根強く残ってしまったこと、宗教者も解放への取り組みが遅すぎたこともある。これからどうしていくかについては、療養所に行き予防法がなくなり何かが変わりましたかと聞いたとき返ってきた言葉は、代わらなければならないのは貴方たちの方ですよと言われた。何故私たちが代わらなければいけないのですか、隔離をしてきた社会の側が変わらないと変わらないですよと言われた。我々がハンセン病と関わる時の基本姿勢としては、一つには人間回復である。昭和63年に愛生園に長島大橋が出来た。これは人間回復の橋といわれている。療養所の人たちの人間性回復の橋であると同時に我々が橋を渡りハンセン病問題の実態をきちっと見ていく、歴史を検証していく、我々社会の側の人間性回復のための橋である。これが私の基本的スタンスでありこの思いでやってきたしこれからもやっていきたい。

我々差別してきた側としていまだに何もやっていないことについては、真宗の檀家さんを療養

所にお連れすることがあるがその時必ず言われることは、今日貴方の目で見たと感じたことをそれぞれのところに帰ってお話をしてください、そのことが私たちの一番の願いですと言われる。高齢化については愛生園の平均年齢はすでに 81 歳、新しい患者が出てこないで年々平均年齢は上がっていくので問題の真の解決に遣された時間は少なくなってきている。

### **3 . 次回 (10 月 24 日) 等の予定**

次回 10 月 31 日は、先日 10 月 4 日に完成した KOBE 鉄人プロジェクトの責任者である岡田誠司さんをお迎えする予定です。

番組に対するご意見、ご感想はこちらまで : [buyou49@nifmail.jp](mailto:buyou49@nifmail.jp)